

高島炭鋳と炭鋳文化：パート2 炭鋳文化の飲酒依存性について

山本, 勇次
活水女子大学

<https://doi.org/10.15017/2236709>

出版情報：九州人類学会報. 17, pp.1-4, 1989-10-23. Kyushu Anthropological Association
バージョン：
権利関係：



高島炭鉱と炭鉱文化

パート2：炭鉱文化の飲酒依存性について

山本 勇次

(1) 九州人類学研究会での発表要旨

私は、昭和61年11月に閉山した三菱高島炭鉱の所在地である長崎県西彼杵郡高島町にて、閉山以来、文化人類学的なフィールドワークを続けて現在に至っている。その調査結果の一部は、九州人類学研究会の昭和63年4月例会において「高島炭鉱と炭鉱夫文化」と題する中間報告の形で発表させて頂いた。その口頭発表の内容はおおむね論文（山本、1988b）として既に出版されている。従って、同様の論旨を再度ここで繰り返すことは控えさせて頂きたい。

ただ以下の文脈との関連でその骨子を略記すると、デスクワークの一般的サラリーマンの視座から差異化されうる、(1)命がけの仕事への誇り、(2)同僚への強い友情、(3)伊達男的な自己同一性、(4)顕示的消費性・低貯蓄性、(5)アルコールへの日常的依存性、(6)婚姻・家族関係の複雑性、(7)インテリに対する反感などの諸特徴を包括した「炭鉱文化」とでも称されるべき“サブカルチャー（副次文化）”の一つがその論文では仮説的に提唱されている。そして、炭鉱文化との示差的脈絡でホワイトカラーの俸給生活者が一般的に共有しているサブカルチャーを「サラリーマン文化」と仮称し、現在長崎周辺地域で発生しており、近い将来には日本各地で起こるだろう炭鉱離職者を巡る種々の社会問題をサラリーマン文化と炭鉱文化という二つのサブカルチャー間の「内地文化摩擦」として考察することの重要性が論じられている。国際化の時代状況の中で異文化間の文化摩擦が脚光を浴びているが、その国際化の余波で派生される一つの文化圏内の異なるサブカルチャー間の内地文化摩擦の現象も文化人類学徒の緊急の調査・研究課題であると主張したはずである。

(2) 高島の現況と高島研究のその後

現時点（平成元年5月）において、高島町の人口減少も1,500を割ったところで一段落を迎えている。昨年からは布団製造工場が操業を始め、食品工場が近く操業を始める予定であり、トマトの企業的栽培が目下計画されている。これらは、高島町役場の企業誘致政策の地道な努力の成果として評価されるものの、何れもが小規模企業であるので雇用力の確保と言う点では満足のいく状況ではない。高島町の活性化を企業誘致で行うという方針は、閉山後3年目の現時点で大きな方針修正を余儀なくされていると言わなければなるまい。

この人口減少の影響を受けて、現在の高島町は人口の35%以上が65歳以上の高齢人口で占めるという高齢化社会の最先端を迎つつある。このまま企業誘致計画が好転しなければ、高齢化現象は更に極端に走るであろうし、町の財政は確実に破綻への道を歩むことになるであろう。現在の高島で私の注目する社会現象は、新たな階層分化が発生していることである。それ以前は炭鉱離職者として同一の社会的カテゴリーで包括出来た集団が、誘致企業に再就職出来た集団とそれに失敗した集団とに分化してしまったのである。前者のグループには、たとえ再就職による自動的な「黒手帳（炭鉱離職者の失業保険）」の喪失があるとも、明日への生活に蘇生への兆しが感じられるが、後者のグルー

ープには暗闇と虚無しか残されていない。まして、黒手帳が強制的に期限切れとなる本年11月になれば、彼らを待っているものは一体何であろうか？

筑豊地方の諸炭田が順次閉山される中で炭鉱離職者の間にアルコール依存症者の多出する現象をどこかで読んだ事があった。同様の問題が現在の高島にも発生しており、その発生が上記の第2のグループの成立と強い関連があることは間違いのない事実である。ここ一年余り私は高島町の断酒会のメンバーと接触して彼らのライフ・ヒストリーを収集している。この調査は実に効率の悪いものであるが、その経過の中で、炭鉱文化の一つの重要な特徴として炭鉱労働者が劣悪な作業環境内での激しい労働により蓄積されたストレスを解消する手段として飲酒に日常的依存をする生活パターンがあり、飲酒を正当化する価値意識の伝統があった（山本 1988b:738）とする私見の重要性を再確認している。

残念なことに閉山以来の人口流出により高島町人口の老齢化が極端化した現時点において、炭鉱文化と飲酒依存性との関連性を実証的に検証する調査は、最も適切な調査母集団である青壮年の元炭鉱労働者達が殆ど皆無のため実施しにくい。この様な理由から著者は、一方で元アルコール依存症者であった元炭鉱労働者のライフ・ヒストリーを細々と収集する傍ら、他方で、間接的な二つの統計調査を実施してその結果を組み合わせ「比較分析」を行うという方法で炭鉱文化と飲酒依存性との相関関係を統計的に検証することを試みている。以下においては、この比較分析法の概略を述べてみたい。

(3) 調査とデータ収集の概略

その第一の調査は、昭和61年夏季休暇中に実施した長崎市の主婦 111名を対象とした飲酒意識・実態調査である。これは私が指導する活水女子短期大学家政学科2年のゼミ学生6名によりデータが収集された。質問票を使用し「家庭訪問」形式の聞き取り調査の方法が採用された。その第二の調査は、昭和62年秋に実施された高島町の町民 306名を対象にした質問票を使用した聞き取り調査である。この調査は、長崎大学医学部衛生学教室教授齋藤寛氏を代表とする「高島地域保健研究会」による高島町民の秋期健康診断の「問診」という形式で行われた。実際のデータ収集には、研究会の会員の他に長崎大学医学部・教育学部そして活水女子大学の学生諸君多数が応援してくれた。

これらの調査の結果には、三つの重要な相違点がある。一つは、後者の被調査者の数が前者の3倍に近い調査母集団の数量的相違が見られる。二つには、前者の調査母集団は30代から50代の主婦が主軸であるが、後者には50代以上の後期壮年者とりわけ老齢者が顕著であり、しかも男女をともに含んでいる。最後に、前者の回答結果と比較すると後者のそれに欠損値の多さが目だつことである。これには聞き取り調査の実際のやり方の相違が反映していると思われる。前者の場合には、被調査者の個人宅で調査者がゆっくりと聞き取りを行った。それに対して後者の場合には、健康診断を済ませて不規則に流れて来る複数の被調査者を同一の場所で複数の調査者が面接するという流動的な方法を取らざるを得なかった。この様な調査結果の相違点はそれぞれのデータの質に何等かの相違として反映していると考えられるが、比較考察の過程において具体的にどの様な意味を生じるかの論考は、ここでは不問と伏し今後の課題としたい。

(4) 比較考察の概略

上記の二つの調査結果を比較考察すると、以下の四点の知見が得られた。まず第一に、長崎在住の主婦群の間では、飲酒への参加ならびに飲酒行為の肯定の双方において前者の方が後者よりも一層大きい親和性を示した。これは一見すると、炭鉱文化と飲酒の親和性に関する私の仮説を否定しているように見える。第二点として、長崎市の主婦達の年代別の飲酒行為・意識の比較をすると、高齢化するほど飲酒行為の受容および飲酒意識の両面において否定的（逆に若年化するほどより肯定的）になる結果が得られた。第三には、高島町住民の飲酒・喫煙に関する男女差を考察した。その結果、男性は飲酒に極めて肯定的であるのに対して、女性はそれに否定的であるという論点の実証された。最後に第四の比較が、高島在住の元炭鉱労働者の男性とそうでない男性との間でなされた。それによれば炭鉱労働者の飲酒への相対的に強い親和性は明かである。しかし、この比較に使用されたデータの回答者総数が少ないので、その比較結果で私の主張する仮説の妥当性が検証されたとするのは危険であろう。

以上の四つの論点がどの様に整合出来るのであろうか？ 第一の論点は、「サラリーマン文化」（山本、1988b：722）と「炭鉱文化」との間にある飲酒への依存性が前者よりも後者において遥かに大きいという私の仮説を反証するように見える。しかしながら、第四の論点は同一の仮説を確認している。これらは本当に矛盾しているのだろうか？この疑問を解消するためには、まず長崎と高島での母集団の平均年齢差、更に第二の論点（高齢の主婦ほど飲酒行為・意識への否定度が強まる）を考慮して頂きたい。これらから、高島主婦群の方が長崎よりもかなり高齢化するので飲酒に対する否定度が高くなっているという要因が考慮されるべきであろう。

次に、第三の論点から、高島では飲酒に関する肯定度が男女間で明瞭に反転していることに注目したい。私自身の聞き取り調査によれば、高島の女性達が飲酒に反感を持ち否定的なのは、日常茶飯事に過剰飲酒者によるトラブルに巻き込まれてた経験や自分の亭主の飲酒の問題で悩んだ経験が多いことによる。それに反して、元炭鉱労働者の男性達は職場のストレスを解消する手段として飲酒を肯定し、それを正当化する価値観を尊ぶようである。従って、ここで推察される結論は、炭鉱文化と飲酒の関連性は男性の場合には強い親和性を示すのに対し、女性の場合には男性の強い親和性に対する反発としての「逆親和性」を示していると言うことが出来よう。

(5) 結論と今後の課題

以上の比較考察を総括すると、炭鉱文化のもつ「男性の飲酒」への親和性がサラリーマン文化のもつそれよりもより強いという修正仮説が実証されたと見なしうるものと思われる。高島において数年前に実施された飲酒調査のデータが最近発見された。長崎県精神衛生センターによる「酒と健康についての調査」がそれであり、200人近い当時高島在住者が回答している。このデータは現在コンピュータに入力中で近日中に分析される予定だが、その分析結果が出れば上記の修正仮説はより一層具体的に実証されるものと期待される。

更に、別稿（山本、1988a：11-13）において論考したように、従来の飲酒研究には精神医学的なアプローチが顕著で社会学的な視点が軽視されて来たように思う。ここにて概説されたような社会医学的な飲酒行為・意識の実態調査を積み重ねながら、飲酒研究の調査方法論的考察を進めること

も今後の重要な研究課題であろう。

参 考 文 献

山本勇次（1988 a）

「飲酒動機の論理階型：ベイトソンの飲酒調査試論」、医療法人志仁会西協病院（編）『開設30周年記念論集』西協病院自費出版、pp. 11-16。

山本勇次（1988 b）

「高島炭鉱社会試論：サブカルチャーとしての炭鉱文化論をめざして」“柏祐賢著作集”完成記念出版会（編）『現代農学論集』日本経済評論社、pp. 720-746。